

私わたくしに拙せつ懷くわいを陳のぶる一首いっしゆ 并あはせて短歌たんか

四三六〇番

皇祖すめろきの 遠とほき御代みよにも おしてゐる 難波なにはの国くにに
天あめの下した 知しらしめしきと 今いまのをに 絶たえず言いひ
つつ かけまくも あやに恐かしこし 神かむながら わご
大君おほきみの うちなびく 春はるの初はじめは 八十種やちくさに
花咲はなさきにほひ 山見やまみれば 見みのともしく 川見かはみれ
ば 見みのさやけく ものごとに 榮さかゆる時ときと 見め
したまひ 明あきらめたまひ 敷しきませる 難波なにはの宮みや
は 聞きこし食をす 四方よもの国くにより 奉たてまつる 御調みつぎの
舟ふねは 堀江ほりえより 水脈みをび引きしつつ 朝あさなぎに 梶かぢ
引ひき上のぼり 夕潮ゆふしほに 棹さをさし下くだり あぢ群むらの 騒さわき
競きほひて 浜はまに出いでて 海原うなはら見みれば 白波しらなみの
八重折やへをるが上うへに 海人小舟あまをぶね はららに浮うきて
大御食おほみけに 仕つかへ奉まつると をちこちに いざり釣つり
けり そきだくも おぎろなきかも こきばくも
ゆたけきかも ここ見みれば うべし神代かみよゆ 始はじめ
けらしも